

まえがき

総合科学実験センターをよろしく

機器分析センター長 佐々木 義 明

1992年(平成4年)4月に発足した機器分析センターは、飯石一明教授('92.4~'97.3)、白木敬一教授('97.4~'98.3)、増山博行教授('98.4~'02.3)が歴代のセンター長を務め、皆様方のご協力・ご支援とスタッフの努力により順調に実績を積み重ね、昨年3月に満10年という一つの節目を通過しました。

2002年3月末の引継において、前センター長から、センター発足以来10年間の自己点検・評価を実施するよう申し送りを受けていた私は、2002年度を自己点検・評価を踏まえた次なる10年を目指すスタートの年にしようと考えていました。

ところが、年度当初の各種予算申請作業が一段落した5月下旬、学内共同利用施設の統合を平成15年度概算要求事項とする提案が小嶋副学長からありました。この概算要求が文部科学省に認められ、永尾隆志助教授ともども、その準備に追われる1年となりました。

山口大学における機器分析、動物実験、遺伝子実験、R I実験等を有機的に結びつけ、より効果的な相互連携体制を構築し、学際的、複合的な領域研究に対応できる効率的な総合教育研究支援を行うとともに、支援に繋がる資源開発を行うことを目的(センター規則)として、機器分析センター、遺伝子実験施設、医学部附属動物実験施設、吉田地区放射性同位元素総合実験室、医学部R I実験室、医学部実験実習機器センターが統合し、山口大学総合科学実験センターとして2003年4月から装いも新たにスタートすることになりました。

総合科学実験センターは、分析実験分野、生命科学分野、資源開発分野の3分野からなり、機器分析センターと医学部実験実習機器センターは分析実験分野に組み込まれ、A 理工学及び生命科学における材料素材等の物性分析並びに生体成分、環境物質等の分析及び解析、B 大型分析機器、専門的解析機器等の有機的な利用及び支援(センター規則)に関する業務を行うこととなります。新センターの運営が軌道に乗るには若干の時間が必要ですが、これまで以上のご支援を賜りたく

お願い申し上げます。また、ユーザーとして大いに利用・活用していただきたいと存じます。

理学部から要求していた理工系教育高度化設備費の“地球環境解析システム”(分析走査型電子顕微鏡+走査型プローブ顕微鏡)が認められ、2003年3月、センターに設置されました。2001年度を除き、毎年大型機器がセンターに導入されたことになり、その総額は3億3千万円を超えました。そのほとんどすべてが理学部の予算によるものでした。これらの機器は、そのまま新センターに引き継がれ、全学の共同利用機器として運用されることとなります。

今年度も研究支援推進員(技術補佐員)の雇用が認められ、昨年度の今川拓昌さんに続き、今年度は中島輝三さんが研究開発部門の研究推進に力を発揮してくれました。それらの成果は、本号に収録されています。

今年度は、7月1日に事務機構の大幅改編があり、それに伴い、機器分析センターの担当部署が理学部から研究協力課に移りました。また、秋から物品請求オーダーエントリーシステムが稼働しました。新センターへの過渡期ということも重なり、森福洋二技官には、事務的な仕事にも種々携わっていただきました。一日も早く、新センターの事務体制が整うことを願っています。

機器分析センターは、今年度限りで終わりを迎えることになりましたが、その機能は新センターへ引き継がれます。同時に、専任の教官・技官も移行します。そこで、当初の予定通り、自己点検・評価を実施することとし、内海俊彦教授(農学部)を委員長とするワーキンググループにその仕事をお願いしました。その報告は本号に掲載してあります。センター設置以後、今日までの活動について高い評価をワーキンググループからいただきました。しかし、なお努力すべき項目のご指摘も受けました。現状に満足することなく更なる発展を目指し、貴重なご意見を新センターへ引き継いでいきたいと考えています。

以上、今年度の主な動きをお伝えし、最後の「機器分析センター報告」をお届けします。